

## 墨絵の中の世界

@Tohoku

## 冬

支度をし始めるころの東北の山あいにある農村の風景が、たまたま好きだ。収穫を終えた田んぼには、褐色になった稲の切り株が寒々としてまだ残り、あぜ道を越えた小高い山には、地味な常緑樹の波を切り裂くように、鮮やかな紅葉や黄葉が不規則に混じっている。空は突き抜けるほど高いのに、どことなく沈んだ空気が村を包んでいるようだ。つらくて厳しい冬は、もうすぐそこまで来ているのだろうか。

た。おばあちゃんと一緒に縁側に腰をかけ、お茶をご馳走になる。茶飲み話に、おばあちゃんからご自身やご家族の思い出をうかがった。戦争中に、都会から大人数の国民学校の生徒たちを受け入れた(学童疎開)時のこと。敗戦直後の混乱期に起きた親族のご不幸。こんな静かな農村まで「進駐軍」のジープがやってきたそうだ。

球大会で準優勝したときのこの。昭和天皇が亡くなり、平成の世になって起こったバブルの崩壊と出口が見えない長い長い不況。就職先が見つからず、「暴走族かプーターローをやった」親戚の子どもたちのこと。おばあちゃんの思い出話は、時系列的には必ずしも一本道でないし、また公式的な「歴史」とは明らかに異なる過去も時々登場するのだけれど、長い間聞いていても、ちっとも飽きない。

く。おばあちゃんが庭に実っていた柚子ゆずをいくつか握もいで、お土産としてもたせてくれた。今号が出るころには、わたしは日本にいる。今年5度目となる日本。今度は長くて、5カ月の東京滞在だ。オフィスは本郷で、宿舎は駒場になるらしい。通勤車輛で疲れきった人たちの顔を眺めているのにうんざりしたら、わたしはまた汽車に乗って北に向かおうと思う。

目的もなく村を歩き回っているわたしが、農家の縁側で日向ぼっこをしていたおばあちゃんに、招き入れられたことがあつ

満州から引き揚げてきた隣村の青年のこと。朝鮮戦争を経て始まった日本の経済成長。集団就職で村を出ていった同級生のこと。そしておばあちゃんの結婚と出産。無我夢中でやった子育て。地元の高校が甲子園の野

また美味しいんだな。あたりが薄暗くなり、わたしはバスが通っている国道まで戻らなければならないことに気づ

では、空が鉛色に重く垂れこめ、純白の雪に埋もれているのに光が乱反射しない。きつとそれは、まるで墨絵の中の世界のようにだろう。☺